

委員会活動報告：翻訳委員会

[報告者]

認定特定非営利法人日本若手精神科医の会 理事
埼玉県立精神医療センター 清水 俊宏

翻訳委員会では、その名のとおりに海外の雑誌や書籍の翻訳を行い、国内の方に広く読んでいただくために活動を行っている。過去には、SCI-PANSS、WHOが作成しているICD-11パイロットスタディ用診断基準の翻訳などを行ってきた。2020年度には、OXFORD PRECISION PSYCHIATRY LABが作成した、COVID-19下における精神科医療のガイダンスである「COVID-19 & clinical management of mental health issues」の翻訳も行った。

■現在の定期的な活動：World Psychiatry 翻訳

現在、定期的な活動としてはWorld Psychiatry (IF 40)というWorld Psychiatric Association (WPA) 発刊の定期ジャーナル(年3回刊行)の翻訳を行っている。World Psychiatry最新号発刊後、JYPOのメーリングリストなどで翻訳希望者を募り、分担して翻訳作業を行っている。その実際の工程は、若手精神科医の翻訳希望者が、各々に翻訳原稿を作成し、翻訳委員が相互に原稿を校閲し、各々が他者からの助言も取り入れた上で最終的な翻訳原稿を提出することで進んでいく。また、JSPN国際委員の秋山剛先生に監訳をしていただくことにより、エキスパートの翻訳スキルを直に学ぶことが出来る。完成した翻訳原稿は日本精神神経学会や世界精神医学会のホームページに掲載いただいている。

https://www.jspn.or.jp/modules/activity/index.php?content_id=256

<https://www.wpanet.org/japanese>

■翻訳委員の活動の魅力

若手精神科医が翻訳委員会で活動する価値は、翻訳の経験自体だけでなく、翻訳を通して切磋琢磨するプロセスにもある。「私たちは翻訳業者ではなく、翻訳プロセスを通して学ぶ機会を得たい若手精神科医である」という前提で、「翻訳というプロセスを通じた個々の人の学びだけでなく、翻訳委員内での相互の交流や意見交換を通じた学びを豊かにしていきたい」という価値観を大切にしたいと考えている。

2021年12月末現在、活動中の翻訳委員会のメンバーの若手精神科医は9名である。各々が翻訳委員の活動を続ける理由についてアンケート調査を行った。その結果を以下に紹介する。9人中8人が、「英語力を上げたい」と考えていた。9人中全員が「自分の精神医学の知識を広げたい」と「精神医学の世界の流れを知りたい」と回答し、世界における精神医学の潮流に関心を持っていた。9人中8人が「翻訳活動を通してJYPOの仲間と交流したい」と考えていた。今回のアンケート調査で、翻訳委員に関わる若手精神科医は、翻訳の経験自体だけでなく、翻訳を通して切磋琢磨

磨するプロセスにも価値を感じていることがわかった。翻訳委員のメンバーが充実して活動していけるように、これから試行錯誤を重ねていくところである。

翻訳を待っている既刊の World Psychiatry も多数あり、現在翻訳に協力してくれる新しい仲間を募集している。World Psychiatry 翻訳を通して、「精神医学の世界の潮流を知る」、「英文に親しめる」、「和文要約力を鍛える」、「若手精神科医の仲間と意見を交わし切磋琢磨できる」ところが翻訳委員会の魅力的である。翻訳委員の活動に関心があれば、ぜひご連絡をいただきたい。

(清水俊宏 連絡先: toshi432@outlook.jp)

■活動メンバー

安藝森央(京都大学医学研究科)

入來晃久(大阪精神医療センター)

大柳有加(北海道大学)

河岸嶺将(千葉県立精神医療センター)

九野(川竹) 絢子(京都大学医学部附属病院)

北岡淳子(瀬野川病院)

澤頭亮(北海道大学医学院・医学研究院・医学部医学科神経生理学教室)

清水俊宏(埼玉県立精神医療センター)

下島里音(鹿児島大学病院 神経科精神科)

俊野尚彦(十条産業保健事務所)

福島弘之(醍醐病院)